意味と対象

―― フッサール意味論に対するトゥーゲントハットの批判をめぐって ――

小池　稔

トゥーゲントハットは，最近の一連の著作において，<意識哲学>，とりわけ<現象学>との対決を通して，彼独自の新しい<言語分析的哲学>を構築しようと野心的な試みを展開している[1)]。

トゥーゲントハットが自らの<哲学>を展開するに当って何よりもまず現象学を引き合いに出し，現象学に対する対決の姿勢を強く打ち出すのは，フッサールが伝統的な対象論的立場に立ちながらも，意味論のもつ問題性を深く認識しており，表現の意味，特に命題の意味についての問題を伝統的概念によって解決しようと努めた伝統的立場の代表者と見做されるからである[2)]。

トゥーゲントハットは，彼自身によって「哲学の根本的問い」として提起される「命題を理解するということはどのようなことなのか」という問いを述語的命題形式の構造契機に即して，次の四つの問いに分節化している[3)]。
(1)単一名群はどのように理解されるか，(2)述語はどのように理解されるか，(3)単一名辞と述語の複合はどのように理解されるか，(4)言表命題はどのように理解されるか。

トゥーゲントハットによれば，フッサールの意味論は(2)の問いにおいて挫折するという。

それゆえ，本稿では主として(2)の問いに関しての，トゥーゲントハットのフッサール意味論批判を検討し，トゥーゲントハットの所論，特に「原初的

意識単位は命題の理解である」[4] という彼の基本的テーゼに関して若干の考察を加えたいと思う。

I

周知のように，フッサールは，『論理学研究』第一研究において，一般に言語と呼ばれるものを標識や目印しなどの単なる指標（Anzeichen）から区別している。前者は「表現される意味」をもつ有意味的記号であるのに対して，後者は単にわれわれに何かを指示（アンツァイゲン）する機能をもつだけで，何ものをも表現しない無意味な記号にすぎないからである[5]。言語が「意味によって生かされた表現」（der sinnbelebte Ausdruck）であるのは意味附与作用（der bedeutungsverleihende Akt）ないしは意味志向と呼ばれる作用によってであり，こうした作用において，言語は「単なる語音」以上のものとなると同時にその意味を媒介として対象にかかわる。「表現はその意味を媒介にして対象を表示する（命名する）のであり，言いかえれば，意味作用とはそのつどの対象を思念する（meinen）一定の仕方である。」[6]

フッサールはこうした「表現―意味―対象」の関係をフレーゲと同じように，二つの名辞，たとえば「イェナの勝者」と「ウォーターローの敗者」は同じ対象を表示するが，同じ意味をもつわけではないということによって，そして逆に，たとえば一頭の馬という表現が同じ意味を媒介にすることによって一方ではブケファールス（アレキサンダーの愛馬）を，他方では馬車馬を表象するということによって説明している[7]。

フッサールはこのように名指すことによって対象を端的に表示する名辞的表現において典例的に示される「表現―意味―対象」の図式をすべての自義的な（kategorematisch）表現形式に適用しうると主張するわけであるが[8]，しかし，上の図式に従えば，たとえば「ＳはＰである」という形式の言表命題は，フッサール自身説明しているように，二通りの対象関係をもつことになる。すなわち「ＳはＰである」という言表命題の対象は，普通の場合，主語対象（Subjektgegenstand），つまりそれに＜ついて＞言表されているもので

あると見做される。だがそうだとすると，言表命題全体の意味に対応する対象は存在しないということになるであろう。そこでフッサールは言表命題全体を「名辞で名指される対象の類似物（Analogon）と解して，その対象を言表命題の意味と区別する。」[9] すなわち言表Pをdaß P（＝事態 Sachverhalt）として名辞化し，これを言表主語と解することによって，意味と対象の上述の関係が言表命題全体においても確立されうるというのである。たとえば，「aはbより大きい」という命題と「bはaより小さい」という命題は，「明らかに異なったことがらを言表している」が，しかし「同じ事況（Sachlage）を表現しているのであり，同じ＜事象＞（Sache）が二重の仕方で述語的に統握され，言表されている」のであるから，「われわれが言表の対象という言い方を，どちらの意味で定義するかに応じて，同じ＜対象＞に関係する，意味の異なる言表が可能となる」というわけである[10]。

フッサールが言表命題において示した，意味と対象との関係を把握する二つの可能性のいずれにおいても，対象とは可能的述定（Prädikafion）の主語であり，意味とは単一名辞の場合と類似的に同じ対象もしくは同じ事態の所与様式である，ということになるであろうが，しかし両者は意味論的には全く異なった次元を指示している。たとえば，「SはPである」という場合，「われわれは当該事象（S）について判断しているのであって，言表命題の意味とか，論理学的意味での判断について判断しているのではない。この論理学的意味での判断〔SはPであること〕は反省的な思考作用のなかで初めてわれわれの対象となるのであり，この反省的思考作用のなかでは，われわれは遂行された言表を単に顧みるだけでなく，必要な抽象（更に適切な言い方をすれば理念化）を遂行するのである。」[11]

してみれば，事態 daß Pが表わす対象は，命題Pの，対象化された意味である，ということになるであろう。

フッサール意味論に対するトゥーゲンハットの批判はまずこの点に向けられる。われわれの通常の言語使用において，われわれは事態についての言表を意味についての言表に翻訳することはできない。たとえば「昨日，雪が降ったということは嬉ばしい」と言う代りに，「昨日，雪が降ったという命題

の意味は嬉ばしい」と言うことはできない。トゥーゲントハットによれば，こうした言語使用のうちに見られる事態「daß p」と命題「P」の意味との不一致性の根拠は，「P」の意味が「daß p」という表現が表わしているものよりもいつもすでにより多くのもの，すなわち「P」が真である，「P」が成立しているという主張を含意しており，「P」のうちに含まれている，こうした「付加的要因」は決して対象的に把握されえない，という点にある[12]。

このことについてのフッサールの説明は，志向的作用一般に「措定的性質」(Setzungsqualitat)が属している，というものである[13]。すなわち名辞ないし名辞的的表象は単に対象を表わすだけではなく，対象を現実に存在するものとして志向し命名する性質を有するが[14]。同様のことは名辞化的表象についても当てはまる[15]，というのである。だがトゥーゲントハットによれば，こうしたテーゼはたしかに質料的対象を表わす単一名辞には当てはまるが，「daß p」という表現には当てはまらない，と言われる。それというのも，「われわれが＜daß p＞と言うとき，その事態の存立（ないしは思想の真理）が潜在的に同時に主張されているということは，われわれが＜daß p＞を＜真である＞と補足しうるのと全く同様に＜偽である＞，＜疑わしい＞等々と補足することができるという事実に反する」からである[16]。つまり「daß p」として名辞化された意味は，名辞化（理念化）されることによって，「一般的意味」に変様化された意味なのであって，「そのつどの現実的な意味」ではないというわけであるが，このことは更にもっと基本的な問題，すなわち「＜P＞についての意味の理解は＜daß p＞がどのような対象を表わすのかをわれわれが知っていることに基づくのか，それともその逆なのか」という問いを生ずる[17]。

この問いは一見単純にみえる。それというのも，「daß p」が「P」の対象化された意味であるとすれば，「daß p」の確定は「P」の意味をすでに前提しているということを含意しているはずであるからである。だがもしそうだとすれば，「P」の意味は対象的な仕方とは異なる仕方で説明されなければならない，ということになるであろう。しかしこうしたことは上述の「表現—意味—対象」という図式に矛盾する。意味附与作用，すなわち対象意識

に支えられていないような意味は，フッサールにとっておよそ「無意味なもの」として却けられてしまうからである。言表命題の意味はただ事態として，すなわち複合的対象としてのみ＜根源的に＞意識されうる[18]。たとえば，「とうとう雨が降った――これで農民は喜ぶだろう」という場合，フッサールは次のように説明している。「端的な言表の場合，われわれは雨とそれが降ったことについて判断する。われわれにとってこの二つは精確な語義で＜対象＞であり，＜表象されて＞いる。しかしわれわれはただ単にこの二つの表象を前後に並べるだけではなく，一つの判断を，すなわちこれらの表象を＜結合する＞独特な＜意識の統一＞を行なっている。そしてこの結合の中でわれわれにとって事態についての意識が構成される。判断を行なうことと＜何かについて＞何かを措定するこの＜綜合的な＞仕方で或る事態を＜意識する＞こととは，一つのことである。」[19]「これで農民は喜ぶだろう」のこの「これ」は，「雨が降った」という言表された事態をちようど指で何かを示すときのように指示しているのであり，したがって同じ事態を思念しているのである。

このように言表命題の意味が事態だとすれば，それはその部分表現の意味の複合によって生ずるとしか考えるほかはないであろう。しかし，それでは名辞化された命題が表わす対象，すなわち「イデアールな」対象は，それとは異なった秩序の対象からどのように複合されうるのであろうか。

フッサールはこの問題を範疇的綜合の理論によって解決しようと試みている。いっさいの実在的（レアール）な複合から原則的に区別される事態の複合は，この綜合が範疇的作用の綜合である，ということによって説明される。フッサールは次のように述べている。「＜範疇的な諸機能は感性的対象を形式化するにもかかわらず，その実在的な本質に何の影響も与えない＞……対象は知性によって，特に認識（もちろん認識自身も一つの範疇的機能である）によって知性的に把捉されはするが，しかし変造（Verfälschen）されるわけではない。……範疇的諸形式は諸部分を接着し結合し組み合わせて感性的に知覚されうる一つの実在的な全体を生み出すのではない。……もしそうでなければ，感

性的知覚の根源的所与はその固有の対象性を変様されることになり，そしてまた関係づけ結合する思考と認識の作用も現にあるものの思考と認識の作用ではなくなって，現に存在しているものを別のものに偽造変形すること（fälschendes Umgestalten）になるであろう。……範疇的な作用（たとえば集合作用や相関化作用）によって生ずるものは，明らかに＜そのように基づけられた作用の中でのみ可能な，第一次的に直観されたものの客観的把握（Fassung）＞のうちに存立しているのである。」[20]

範疇的な作用は，綜合作用として，本質的に他の作用に基づけられており，究極的には実在的対象を表象する感性的作用に基づけられている。つまり基づけられた範疇的な作用によって，基づける諸作用の対象の綜合が成立し，新しい綜合的対象性が構成されるというわけであるが，もしそうだとすると，たとえば，「ハイデルベルクの城は赤い」という言表命題は，「ハイデルベルクの城」という単一名辞だけでなく，「赤い」という述語表現も対象（「赤」）を表わしているのでなければならないということになるであろう。

フッサールは述語的命題（A ist a）と全体一部分一命題（A hat a）とを単一の図式 A ist（hat）a において分析している[21]。それというのも，フッサールによれば，述語的命題における述語とは「主語対象の一部分を指示する」「非独立的な部分」，すなわち「対象が＜実在的な＞意味で，あるいはもっと適切にいえば実的な（reell）意味で，つまり対象を実際に構築するものという意味で＜所有する＞すべてのもの，しかも対象が織り込まれているあらゆる関連を捨象しても，なおかつ対象がそれ自体で所有しているすべてのもの」のことであり[22]，したがって述語的命題は全体一部分一命題と等置されうると考えられるからである[23]，したがって「A ist a」は，「A hat a」の場合と同じように，「a ist in A」という形式に変換可能である，と言われる。してみれば，「ハイデルベルクの城は赤い」は「赤（die Rote）が城に内属している」という形式に変換されうることになるが，しかし「赤」は実在的な対象ではなく，属性（Attribut）なのであり，それは実在的な仕方で，たとえば「机に引き出しがついている」というように，城に付着しているとか，実在的な分離可能な部分として城に現われているとかいうわけのものではない

であろう[24]。

「言表命題全体の意味は事態である」というフッサールのテーゼは，「綜合的対象性はその部分対象の範疇的綜合によって構成される」（「命題全体の意味は部分表現の意味から生ずる」）というテーゼに導かれ，後者は「述語（「赤い」）の意味はその名辞化された変様（「赤」）が表わす対象である」という帰結を生み出す[25]。

トゥーゲントハットは，このように名辞的表現をあらゆる表現形式の原型とし，「意味附与」意識をその対象論的立場から直ちに＜作用＞と解釈するフッサールの意味論は不当仮定の虚偽（hysteron—proteron）を犯すものである，と批判する。言表命題の意味がその言表命題を名辞化した事態であるという主張は，そして全く同様の手続きによって述語の意味が抽象的対象（「赤」）であるという主張は，「意味の後からの対象化によってはじめて生ずるような対象を根源的意味附与意識へ逆投影するという不当仮定の虚偽に陥らざるをえない」からである[26]。

「赤が城に内属している」あるいは「赤が城と複合している」という命題は，「城が赤い」という命題に照らしてのみはじめて理解されうるのであって，その逆ではない[27]。一般にひとが表現の意味について語りうるのは，その表現の理解との連関においてであり，相互主観的な了解の最小の単位，つまり原初的な意味単位は名辞ではなく，命題であるがゆえに[28]，述語的命題の理解こそが表現に意味を附与する原初的な意識単位でなければならない[29]，したがって，命題を理解するということはどのようなことなのかを問うことこそが＜哲学＞の根本的な問いとならなければならない，とトゥーゲントハットは主張する。

II

フッサールの意味論が不当仮定の虚偽に陥ったのは，上述のごとくトゥーゲントハットによれば，フッサールが＜意味附与＞意識をその伝統的対象論的想定のために直ちに＜志向的＞対象意識と捉えたことに起因する，と言わ

れる。

ところで，トゥゲントハットによれば，フッサールが意識の本質的特性とみなした<志向性>という概念，すなわち「対象へ向けられていること(Gerichtetsein anf Gegenstand)」という意識様態は，たとえば道標が何かに向けられているというのと同じように，単なる「比喩」であるにすぎず[30]，その内実は主語一述語一目的語という文法構造をもつ他動詞的表現によって記述される一つの関係にほかならない[31]。だが，同様の文法的構造をもつ動詞的表現がすべて意識の志向的対象的関係を示すわけではない。そこで，志向的他動詞と非志向的動詞（たとえば食べる・打つ等）とを区別する判別基準が提出されなければならないが，トゥーゲントハットは，この判別基準は動詞の文法的対象がどのような種類のものであるかを問うことによって見い出すことができると言う。すなわち，トゥーゲントハットによれば，志向的他動詞の特徴は，具体的な（知覚しうる，空間時間的な）対象を表わす単一名辞を目的語としてもつのではなく，名辞化された命題，つまり「事態」を表わす，「daß p」という形式の言語的表現を目的語としてとる，という点にある[32]。

通常，具体的対象を表わす単一名辞を目的語としてもつようにみえる志向的他動詞，たとえば「見る」，「愛する」，「恐れる」等々も，実際には，具体的対象（主語対象）と事態との間に成立する関係を表わす意識の在り方，すなわち「命題的意識の在り方」(propositionale Bewuhtseinsweise) を含んでいる。たとえば，「XはNを恐れる」という場合，XはNが実在していなくとも恐れることができるが，Nが存在していることを思念する (meinen) ことなしに恐れることはできない。したがって，われわれはNが存在していることを思念すること，より厳密に言えば，「N」において表現される性質が帰属しているような対象が「ある」(es gibt) ということを思念するという仕方においてのみ，Nに志向的（意識的）にかかわることができる。してみれば，単一名辞を目的語としてとる志向的他動詞はその名辞によって指示されている対象の存在に関する命題的意識を含んでいるのであり，「存在命題」を真とみなす (Fürwahrhalten eines Existenzsatzes) という「命

題的態度」(prositional attitude) に基づいていると言わなければならない。このようにして，トゥーゲントハットは，「志向的意識といわれるものはすべて，顕存的にせよ潜存的にせよ，命題的意識であり」，フッサールが「志向性」と名づけ，いわゆる直観的な記述において「何ものかに向けられている」と性格づけた意識の特殊な性質は「命題理解」(Satzverständnis)の投影にすぎない，と結論づけている[33]。

E・ホーレンシュタインは，述定作用が唯一の基礎的な言語的・認知的構造であり，発生的にも体系的にも他の構造に先行するものであるというこうした主張は，一種の論理主義であり，認知的および言語的には第二次的な形式（述語的構造）によって原初的で基礎的な形式（前述語的な認知構造）を解明するという不当仮定の虚偽を犯すものである，と批判している[34]。

ホーレンシュタインによれば，述語的命題の形式は，トゥーゲンハットが主張するように，もはやその背後に遡りえないような原初的な意識単位であるのではなく，前述語的な認知 (Kognition) に基づけられているのであり，このことは 1. 事実確認的な文形式（「ポールは来る」）に対する，呼びかけ（「ポール」）や命令（「来い」）などの事実確認的ではない文形式の先行性，2. 形容詞による述定（「城は赤い」）に対する，名辞の形容詞による限定（修飾）（「赤い城」）の先行性を示すことによって証示される，と言われる[35]。

事実確認的でない文形式の典型的な事例は，幼児の言語使用における「一語文」(Einwortsatz)，たとえば「ママ」とか「ワンワン」等に見い出されうる。

トゥーゲントハットによれば，こうした一語文は，何かを直示的に (indikativisch) 指示する，あるいは何ごとかを命令し願望する擬似一述語 (Quasi-Prdäikat) にすぎず，その使用（したがってその理解）は，たとえば，「赤」という何かが知覚状況のうちに示されるとき，ただそのときにのみ「赤い」という語を使用し，そしてそうした語を使用する者だけが「赤い」という語を「正しく」理解する，というように状況関係的である。したがって，一語文の使用は述語のノーマルな使用，すなわち単一名辞によって補われることを必要とし，そしてまさしくそのことによって状況非依存的である述語の使用

とは原理的に区別されなければならない[36]。トゥーゲントハットにおいては，述語的構造は意識のアプリオリないわば「深層構造」なのであり，したがって，述語的命題の意味がそのつどの命題使用の状況によって規定されるという主張はプラグマティックな言語相対主義を帰結するものとして斥けられるのである。

上述の幼児の一語文の使用に関しては，トゥーゲントハットは成人言語の単一名辞の使用と対比的に説明している。たとえば「火事だ」という表現は，状況への依存的関係を可能にする述語的命題における単一名辞にほかない。つまり「火事だ」という擬似述語は，たとえば「ハイデルベルクの市役所が燃えている（火事だ）」という述語的命題における単一名辞が或る知覚状況，あるいはその知覚状況のうちの何かを同一的なものとして確定し，他の任意の状況からほかならぬこの状況に自らをかかわらせるということによってのみ，「ハイデルベルクの市役所が燃えている」という命題から区別されるのであり，こうした自己を状況に関係づける（sich beziehen）という意味での状況関係性は状況依存的という意味での状況関係性とは原理的に異なるものであるというわけである[37]。したがって，状況によっては第一義的には事実確定的に使用されているのではなく，「逃げろ」という命令的要請として用られている場合でも，それは「市役所が火事である。君は逃げなければならない」という述定の省略形にすぎないのである。事情がもしこのようなものだとすれば，幼児における一語文の使用は言語分節化能力の未発達な段階における状況依存的な言語使用にすぎず，本来的には省略された述定である，ということになるであろう。

ホーレンシュタインは，こうしたトゥーゲントハットの主張に対して，最も初期の幼児言語に見られる一語文的表現は対象を指示する名辞として，あるいはまた対象を「性質づける」述語として解すべきではなく，意欲にかかわる言語行為をいわば「副詞的に」限定するものとして解すべきである，と主張する[38]。幼児は，「私」や「君」といった指示語や「命令する」といった行為遂行的動詞や「命令」といった行為の名辞化を用いることができるようになる以前に，名辞や動詞を呼格や命令法として使用することをマスターし

ているのであり，こうした表現に内在的に呈示される「質的なものは，対象や対象の性質にまで構成される以前に，志向作用を限定するものとして登場している」のである[39]。したがって，幼児にとって実在とは端的な現前を意味しているのであって，存在・非存在の区別の認知に基づけられているわけではないのである。してみれば，認知的に存在・非存在の区別をなしえない幼児の場合，「悪魔が恐い」という表現は「私は，私が現実に存在しており虚構でないと思念している悪魔が恐い」という「命題的意識」を含意してはいないのである[40]。そしてこのことは，幼児の言語分節化能力が未発達であることに起因しているのではなく，むしろ言語習得の過程が，たとえば述語となる品詞の順序が動詞，形容詞，名詞の順であるというように，「本質的法則に従う発生」なのであり[41]，そしてさらにこの法則が，たとえば知覚対象の内在的性質が一定の順序に従って（「小さな円く白い」であって「円い白く小さな」ではない）規定されるというように状況不変的な認知構造に基づいている，ということに由来しているのである[42]。

述語の用法についても同様の構造が見い出されうる。述語の機能は主語対象を性質づけること，対象を分類し区別することにあるというトゥーゲントハットの主張に対して[43]，ホーレンシュタインは，名詞の修飾的限定は述語的記述に先行する記述形式である，と反論する。それというのも，「諸規定の基体」としての対象が現われるその与えられ方の仕方の解明に直接的に対応する言語表現は「赤い城」のように冠頭修飾語を伴った形をしているからである[44]。この記述は発言の対象を性質づける機能（「熱いミルク」）と発言の指示決定の機能（「このミルク」）の二つの機能をもつ。これに対して，述語的記述においては，指示決定の機能は状況独立的伝達を可能にするため放棄され，その代りに属性の肯定という機能がつけ加わるわけであるが，「属性付与」と肯定の働きである述語づけは，知覚対象における一定の性質の分離を前提しているのである（「ここにミルクがある。このミルクは熱い」）[45]。

たしかに，高次の認知的段階に到達した成人においては，それに先行する低次の段階でのすべての働きが再構造化されることによって，トゥーゲントハットが主張するように，述語的命題形式が相互主観的な了解の原初的な意

味単位として最も基本的な構造であるということができるにしても，それに先行する基本的な認知の働きを省略された述定であるとか擬似述語であるとかいうように述定の機能から導き出すことは，やはり不当仮定の虚偽であるといわざるをえない。超越論的現象学的視点からすれば，言語現象が根拠づけられるのは，究極的にはもはやそれを更に基礎づけるような現象がないことが直観的に見てとれるような構造をもった認知現象のうちに言語現象が基礎づけられる場合だけである，というのがホーレンシュタインの主張である[46]。

＜言語への転囲＞から＜認知への転回＞というホーレンシュタインの主張は，フッサールが『経験と判断』において詳細に分析した，前述語的段階での対象の解明（Explikation）の過程を意味論と言語全体の認知的基礎づけの過程として捉え返す試みとして展開されている。

フッサールによれば，対象は，自我の対象構成的作用に先き立って，意味相互間の内在的結合の法則（連合 Assoziation）によってすでに意識の深層において対象意味として受動的に分節化され構造化されている先所与的なもの（Vorgebenes）からの触発に応じて，これに自我の視向をさし向けることによって「諸規定の基本」として構成される[47]。この基体は，対象への一定の関心によって動機づけられた知覚において，受動的に保持されつつ，その固有性質や部分契機の規定（α，β，γ…）の把握を通して展開される。知覚による対象解明の連続的連関は先述定的綜合過程であり，規定は基体のもつ同一性をもたず解明項であるにすぎない。つまり対象の解明は基体（S）を解明項（P）として規定していく地平（予料）志向の充実過程である。受動的段階での対象解明のこうした先述語的構造が能動的に把握され顕在化されることによって，＜SはPである＞という述語判断へと展開されるのであり，述定は先述定的経験構造に基づけられているのである[48]。してみれば，ホーレンシュタンが主張するように，「一定の仕方で限定づけを行う知覚に対応する直接的な言語表現は述語ではなく修飾語である」と言えるであろう。たとえば，不意に白い馬を見た者は，自分の知覚経験を「白い馬／」と表現し，「ここに馬がいる。この馬は白い。」というようには表現しないであろう

からである[49]。

トゥーゲントハットが意識の志向性をもっぱら「対象に向けられていること」として捉え，先述定的段階における<対象構成>の際に働く受動的原志向性を，そしてさらに受客的対象解明の際に働く地平（予料）志向を認めえなかったところに，彼の言語分析論の限界点が示されているように思われる。

だが他方，「基体と規定の関係」として展開されるフッサールの対象構成論は，「規定」が新しい経験作用において「基体」として働くことを示している。この「規定の基体化」は『論理学研究』以来「名辞化」といわれていたものであるが[50]，もしそうだとすれば，「基体と規定の関係」の能動的展開として形成される述語的判断において，述語は，「規定の基体化」に対応して，対象を表わすものとして捉えられることになり，ここに再びトゥーゲントハットによって指摘された意味論的アポリアガが登場してくることになるであろう。

述定に関する，トゥーゲントハットとホーレンシュタインの主張の相違は，両者が共に主張しているように，「内観」に対する両者の観方の根本的相違に基づいている。してみれば，述定に関する上述の問題は，現代哲学においてほとんど骨董品化されている「内観」を，トゥーゲントハットのフッサール意味論批判に対するホーレンシュタインのメタ批判によって開かれてくる新たな視座のもとで改めて問い直すことによって，より基底的な層において解明されることになるであろう。

注

1) Tugendhat, E., Phänomenologie und Sprachanalyse, in : *Hermeneutik und Dialektik* (1970), *Vorlesungen zur Einführung in die sprachanalytische Philosophie* (1976), *Selbstbewußtsein und Selbstbestimmung* (1979).
2) Tugendhat, *Vorlesungungen zur Einführung in die sprachanalytische Philosophie* (以下 *Einführung* と略記), S. 134.
3) *Einführung*, S. 139.
4) Tugendhat, *Phänomenologie und Spsachanalytik* (以下 Ph. u. Sp. と略記),

S. 19.

5) Husserl, E., *Logische Untersuchungen*, Max Niemeyer Verlag, 1968, 2Bde (以下 L. U. 略記) I. Unters. §1.

6) *ibid.*, § 13.

7), 8), 9), 10) ibid., § 12.

11) *ibid.*, §34.

12) *Eivführung*, S. 157.

13) *L. U.* V. Unters. § 20, § 32 ff.

14) *ibid.*, § 34.

15) *ibid.*, §37.

16) *Einführung*, S. 157.

17) *ibid.*, S. 158.

18), 19) *L. U.* V. Unters. §36.

20) *L. U.* VI. Unters. § 61.

21) *ibid.*, §48.

22) *L. U.* III. Unters. §12.

23) *L. U.* VI. Unters. §48.

24) *Einführung*, S. 171.

25) *ibid.*, S. 169.

26) *Ph. u. Sp.* S. 11.

27) *Einführung*, S. 171.

28) *Ph. u. Sp.* S. 23.

29) *ibid.*, S. 19.

30), 31), 32) *Eivführung*, S. 98.

33) *ibid.*, S100 ff.

34) エルマー・ホーレンシュタイン，村田純一他訳『認知と言語』産業図書，25頁—26頁，42頁—43頁。

35) 同 上27頁。

36) *Einführung*, S. 208 ff.

37) *ibid.*, S. 225.

38) ホーレンシュタイン，前掲書28頁。

39) 同上，28頁—30頁。

40) 同上，34頁—35頁。

41) 同上，48頁，50頁以下。

42) 同上，59頁—61頁。

43) *Einführung*, S. 183.

44) ホーレンシュタイン，前掲書26頁。

45) 同上，40頁—41頁。

46) 同上，42頁，47頁。

47) Husserl, E., *Erfahrung und Urteil*（以下 E. U. と略記），S. 79ff.

48) *E. U.* S. 121ff.

49) ホーレンシュタイン，前掲書41頁。

50) *E. U.* S. 152.

（筆者　岩手大学人文社会科学部教授）